

やっとなら

藤田浩史

大分県・26歳・会社員

「あなたが思っているほど、私はあなたのことが好きじゃなくなったから」

この季節がくるたびに、僕はこの言葉と君を思い出す。忘れもしない駅での一言。それがどんなに僕に打撃を与えたか。あの日から8年が経とうとしているけれど、僕は頭の中からどうしても、君を拭い去りきれないでいた。

いま君は、どこで何をしているのか全く僕には知る由もない。東北で学校の先生をしていると、風の便りで聞いたことはあった。

18歳の頃、僕は君に僕の思いを強引に押しつける毎日だった。君のことがこんなに好きだ。だから君も僕のことを……ってね。けんかをして、怒っているのはいつも僕だった。君は笑ってくれてばかりいた。そんな毎日が耐えられなくなったあの日、感情を押し殺しながら君が言った冒頭の言葉。さよならを言う日を決めてずっと延期してきて、雨天決行したのがあの日だったんだね。元気でやっているかい？

僕は新しい恋を見つけることができず、大学4年間を過ごした。想い続ければき

っと願いはかなう”という言葉を、いろんな本で見つけた。だからこそ心の中で君に詫びる毎日と共に、君を想う気持ちをずっと温めてきた。それでもやっぱり想いは届かなかった。君の気持ちが変わることはなかった。

空を突き抜けるような青にぬりかえて、並木道のサラサラという葉の音を聞きながら、君が歩いていく。きっと君は、僕の手の届かないところへ行ってしまったんだと、自分に言い聞かせた。あの時と同じ季節がまた巡ってきた。やっとなら僕にサヨナラを言えそうだ。

12月。僕は結婚する。

※18歳の夏に、1年3カ月付き合っていた初恋の彼女からフラれた。別れた原因は私のわがまま。以来彼女への思いを断ち切れず、大学4年の夏に、福岡から彼女が通う大学のある仙台まで飛んだ。思いを告げ、「もう一度付き合ってくれるのであれば、空港で待っている。駄目ならば来なくていい」。空港の待合室で待つこと6時間。彼女は現れなかった。それが彼女の答えだった。